

[原著論文：査読付]

英語の*It*-Cleft構文における焦点要素の移動について

黒木 隆善*

On the Movement of Clefted Constituents in English *It*-Cleft Constructions

Takayoshi KUROGI*

Abstract

This paper explores the syntactic structure of English *It*-Cleft constructions and elucidates a potential problem related to clefted constituents with the combination of the recent cartographic approach and the labeling algorithm. Assuming the Criterion Freezing postulated by Rizzi (2006), the fact that the clefted constituents of *It*-Cleft constructions can be further extracted from the clefted position presents a potential problem to the conventional cartographic approach. In this paper, it is argued that this problem can be resolved under the concept of Maximality put forward by Rizzi (2015) and Chomsky's (2013, 2015) labeling algorithm. In particular, the timing of the application of the labeling algorithm is crucial for solving this problem; the labeling algorithm should be applied at the phase level. Due to this, the clefted constituents can be further extracted in accordance with the concept of Maximality. For the syntactic structure of *It*-Cleft constructions, this paper will argue that the cleft clause is adjoined to the PredP in the copular sentence, and the (null) operator movement occurs within the cleft clause. This structure is similar to that of Parasitic Gap constructions, so this paper will illustrate a common property of both constructions.

KEY WORDS : *It*-Cleft constructions, Maximality, labeling algorithm, Parasitic Gap constructions

1. はじめに

本論文では、英語の*It*-Cleft構文の焦点要素が持つ特徴とその統語構造について、Rizzi (1997) で提案され、盛んに研究が進められてきたカートグラフィ (cartography) 分析、及びChomsky (1993, 1995) で提案されて以降、様々な進展があったミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) における近年の生成文法理論を組み合わせる。また、本論文で論じた*It*-Cleft構文の統語構造が、一見すると関係のない別の構文と類似していることを指摘し、双方の構文に共通する特徴の説明を試みる。

本論文で取り扱う英語の*It*-Cleft構文とは、強調構文の1つである。次の(1)に示した通り、代名詞*it*を仮の主語とし、その後にbe動詞 (copula)、焦点要素、関係節に類似した構造 (以下、分裂節) が後続する構文である。

- (1) It was **John** that Mary saw.
 It copula 焦点要素 分裂節
 (cf. Reeve 2010: 12)¹

(1) に示した*It*-Cleft構文における、焦点要素の構造的な位置については、古くはÉ Kiss (1998) などで、焦点 (Focus) を示すための特別な位置が想定され、分析が試みられてきた。また、カートグラフィ分析においては、焦点要素が生起する位置としてFocPの指定部が独立して想定されており、*It*-Cleft構文においても分析の拡張が試みられている。

Rizzi (1997) に代表されるカートグラフィ分析とは、CPやvPなどの左端周辺部 (Left Periphery) に階層構造を想定し、様々な文法現象を説明するアプローチである。² CPを例にとって考えてみたい。カートグラフィ分析において、CP構造は(2a)のような階層構造を有しており、必要に応じて焦点要素と関係があるFocPや話題 (Topic) 要素と関係があるTopPといった構造が展開される。細かい構造を考えずに、(1) で挙げた*It*-Cleft構文をカートグラフィの分析に当てはめるとするならば、(2b) のように、少なくともFocPの指定部位置に焦点要素が生起する構造となる。

- (2) a. [_{ForceP} Force [_{TopP*} Top* [_{FocP} Foc [_{TopP*} Top
 [_{FinP} Fin [_{IP} I]]]]]] (Rizzi 1997: 297)³
 b. [It was [_{FocP} **John** Foc [that Mary saw]]]

しかし、(1) における*It*-Cleft構文の焦点要素*John*が、カートグラフィ分析で想定されている通常のFocP指定部位置と同じであると想定することについては、慎重な検討が必要となる。それは、*It*-Cleft構文の焦点要素が、Reeve (2010) やHaegeman et al. (2014) で例示されているように、焦点位置からの更なる移動ができるという特徴を有しているからである。

- (3) a. **What**_i was it *t*_i that you saw?
 (Haegeman et al. 2014: 12)⁴
 b. **John**_i it was *t*_i that Mary saw.
 (Reeve 2010: 76)
 (4) *criterial Freezing*
 A phrase meeting a criterion is frozen in place.
 (Rizzi 2006: 112)

従来、Rizzi (1997) 以降のカートグラフィ分析では、FocPやTopPの位置において、指定部と主要部が一致関係 (Spec-Head Agreement) を構築すると、FocusやTopicの素性に関する基準 (criteria) を満たすと想定されている。更に、Rizzi (2006) 以降では、(4) の基準の凍結 (Criterial Freezing) によって、基準を満たした句はその位置で凍結され、更なる移動ができないと提案されている。仮に*It*-Cleft構文の焦点要素が、(2b) のように通常のカートグラフィの階層構造におけるFocPの指定部に生起し、主要部と一致関係を満たしているとするのであれば、(3a) のように焦点要素がwh句となって更に移動したり、(3b) のように更に文頭に焦点化移動することはできないと予測される。そのため、焦点位置からの更なる移動が可能な点について、何らかの説明がなされなければならない。

本論文では、上記の*It*-Cleft構文の特徴について、これまでの先行研究に触れつつ、新たな分析を提案する。2節では先行研究として(3)の事例に取り組んだRizzi (2014) とBelletti (2015) の分析を概観し、経験的な問題点を指摘する。3節では、Rizzi (2015) 及びShlonsky and Rizzi (2018) で提案された、Maximalityの観点からの基準の凍結と、Chomsky (2013, 2015) の議論を確認しつつ、英語の*It*-Cleft構文の構造について提案する。4節では寄生空所構文と*It*-Cleft構文の類似性を取り上げ、共通の特徴を例示し、その解決案を示唆する。5節では、結論としてこれまでの議論をまとめ、今後の研究の方向性を示す。

2. 先行研究とその問題点

2.1 Rizzi (2014)

Rizzi (2014: 35) では、イタリア語の *It*-Cleft 構文を事例として取り上げ、分析を試みている。(5a) のようなイタリア語の *It*-Cleft 構文においても、(5b) のように、*It*-Cleft 構文の焦点要素について、wh 句移動をすることが可能であると報告されている。⁵

- (5) a. E' Gianni_i che hai visto t_i.
is Gianni that you.have seen
 'It is Gianni that you saw'
 b. Chi_i è t_i che hai visto t_i?
who is that you.have seen
 'Who_i is it t_i that you saw t_i?'

1節で論じたように、*It*-Cleft 構文の焦点位置が、ある種の焦点の基準 (Focus Criterion) を満たす位置であると想定するのならば、(5b) の *It*-Cleft 構文における焦点位置、つまり、*è* (is) と *che* (that) の間の位置に移動もしくは生起していた *chi* (who) には、(4) で提示した基準の凍結が適用され、文頭の位置まで wh 句移動を行うことができないことが予測される。

そこで Rizzi (2014) は、(6) のように、*It*-Cleft 構文の焦点要素と分裂節の間に *oggi* (today) など、時の副詞を挟むことができるという特徴に注目している。これは、(7a, b) のように分裂節を外置 (extrapose) させることができることを意味している。この特徴に基づき、Rizzi は、*It*-Cleft 構文の焦点要素が移動する派生を、概略 (8a, b) のように提案している。尚、Foc_{Cleft} は *It*-Cleft 構文の内部にある Foc 主要部を示し、Foc_{LP} は主節の左端周辺部に生じる Foc 主要部を示している。

- (6) E' Gianni, oggi, che devo incontrare.
Is Gianni today that I must meet
 'It is Gianni, today, that I must meet'
 (Rizzi 2014: 41)

- (7) a. E' [_{FocPCleft} Gianni Foc_{Cleft} [che devo incontrare] oggi] ↑
 Extraposition

- b. E' [_{FocPCleft} Gianni Foc_{Cleft} t_{clause}] oggi [che devo incontrare]

- (8) a. è [_{FocPCleft} chi Foc_{Cleft} t_{clause}] [che devi incontrare]
is who that you must meet

- b. [_{FocPCleft} chi Foc_{Cleft} t_{clause}] Foc_{LP} è t_{FocPCleft}
 [che devi incontrare]

(6) や (7a, b) のように、*It*-Cleft 構文で外置が可能であることから、焦点要素が更なる移動をしている事例において、まず (8a) のように、Foc_{Cleft} の指定部に移動した焦点要素 *chi* (who) と Foc_{Cleft} 主要部を残して、分裂節の部分 (*che devi incontrare*) が外置される。その後、(8b) のように、分裂節が抜き取られた FocP_{Cleft} 節全体が Foc_{LP} の指定部へ焦点化移動を行う。この時、FocP_{Cleft} 節全体が焦点化移動を行うため、分裂節内の Foc_{Cleft} と指定部-主要部の一致関係を形成していた *chi* (who) 自体は移動していない。そのため、*chi* は基準の凍結を違反していないことになる。

このように、Rizzi (2014) では、*It*-Cleft 構文の焦点要素が wh 句移動の適用を受けることに対し、分裂節の外置と、FocP_{Cleft} 節全体の焦点化移動を提案することによって説明を試みている。

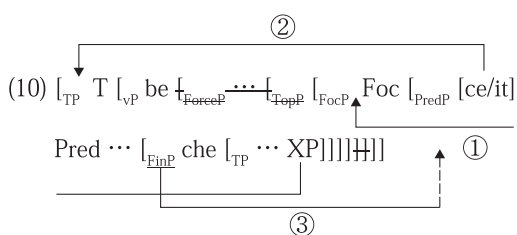
2.2 Belletti (2015)

Belletti (2015) では、焦点要素と分裂節の構造を詳しく分析し、*It*-Cleft 構文の分析を行っている。Belletti (2015) は、Rizzi (2014) と同じく、焦点要素は分裂節の内部から分裂節の左端周辺部へ直接移動する立場を取り (註5参照)、copula が焦点要素を含む CP を補部を取る構造を想定している。それに加え、Belletti (2015) は、分裂節が小節構造に類似していることから、FocP と FinP の間に PredP を想定し、更に CP の左端周辺部が、Force と Top を欠く構造を提案している。また、PredP の指定部には、仮主語が生起し、PredP 指定部から主節の TP 指定部まで移動すると想定している。ここまでの *It*-Cleft 構文の基本的な構造をまとめると概略 (9) のようになる。^{6, 7}

- (9) [_{TP} T [_{rP} be t_{ForceP} ... t_{TopP} [_{FocP} Foc [_{PredP} [*ce/it*]
 Pred ... [_{FinP} che [_{TP} ... XP]]]]]]

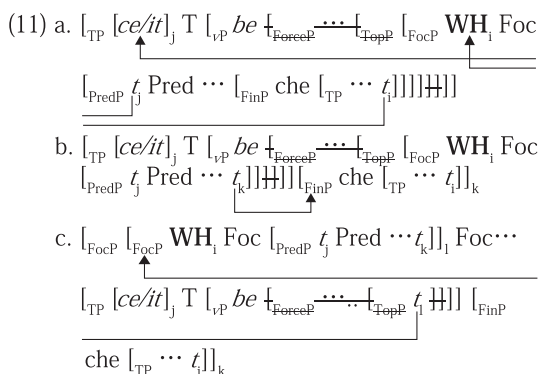
(cf. Belletti (2015))

しかし (9) においても、*It*-Cleft 構文の焦点要素が移動可能である、という (3) や (5) の事例は、(4) に示した基準の凍結の違反となってしまふ。そこで Belletti は更に、Rizzi (2014) の想定に倣い、*It*-Cleft 構文では、(10) のように、分裂節が常に外置されると想定している。



まず、(10)の派生において、XPが*It*-Cleft構文の焦点要素としてFocP指定部まで移動し(①)、その後、PredP指定部に生起していた仮主語がTP指定部まで移動する(②)。最後に、*che* (that)を含む分裂節のFinPが外置操作の適用を受ける(③)。

(10)の派生であれば、仮に焦点要素がwh句であった場合であっても、Rizzi (2014)の議論と同じように焦点要素の主節への移動が可能となる。Belletti (2015)に基づけば、まず(11a)のように、焦点要素(wh句)のFocP指定部への移動、及び仮主語のTP指定部への移動が行われた後、(11b)のようにFinPが外置される。最後に、(11c)のように、FocP全体が主節のFocP指定部へと移動する。この時、wh句そのものは移動していないため、基準の凍結に違反していないこととなる。



2.3 問題点

Rizzi (2014)とBelletti (2015)の分析は、細かい点は異なるものの、*It*-Cleft構文の焦点要素が移動できることに対する説明は同じである。まず、(i)分裂節が外置され、その後、(ii)焦点要素を含むFocP節全体が主節のFocP指定部へ移動する、という分析である。これらの分析は、有効な分析の一つと考えられるが、特に英語の*It*-Cleft構文について考えてみると、経験的な疑問点が残る。

1つは、Rizzi (2014)やBelletti (2015)では、(8a)や(11b)において、基準の凍結を回避するために、義

務的な外置の適用が前提条件となる点である。Ross (1986)やTanaka (2011)等で論じられているように、一般的に、名詞句からの外置操作は随意的である。(12a)では、名詞*A gun*に関係節*which I had cleaned*が後続しているが、(12b)では、関係節が句動詞*went off*の後ろに外置されている。どちらも文法的な文であり、このことから外置は随意的な操作であることが示唆される。もし、*It*-Cleft構文において義務的な外置の適用が前提条件とされるのであれば、外置を義務的にするような、特別なメカニズムを想定する必要がある。

- (12) a. A gun which I had cleaned went off.
b. A gun went off which I had cleaned.

(Ross 1986: 2)

Belletti (2015: 53)では、*It*-Cleft構文における義務的な外置は、移動した仮主語(つまり、(11a-c)における[*ce/it*])と分裂節が局所的な関係を維持しなければならないことを外置操作の動機付けとして示唆しているが、局所的な関係が必要な理由など、明確な説明がなされていない。

もう1つは、外置された要素の特徴についてである。⁸一般的に、外置操作を受けた要素は、文末焦点要素となる。その一方で、*It*-Cleft構文の焦点位置には、別個に焦点要素が現れる。つまり、BellettiやRizziのように*It*-Cleft構文には義務的な外置操作が適用されると想定すると、1つの文において2つの焦点要素が現れることになる。基本的に、同一文中で複数の焦点要素が現れる場合、容認性が低くなることが知られているため(Rizzi 1997: 290を参照)、BellettiやRizziの分析を採用すれば、*It*-Cleft構文はいずれの例においても、少なからず容認性が落ちる、または非文法的な文として処理されるという、事実と反した予測となる。

これらの問題に抵触することなく、且つ、(3)のように焦点要素の移動が可能であることを捉えるために、次節で新たな*It*-Cleft構文の構造を提案する。

3. 提案

本節では、ラベル(label)の観点から基準の凍結を捉えた、Rizzi (2015)およびShlonsky and Rizzi (2018)のMaximalityの概念を援用し、*It*-Cleft構文の焦点要素の移動を捉えることを試みる。まず、Maximalityについて概観し、次に、Chomsky (2013,

2015) で論じられた, ラベル付け算法 (labeling algorithm, 以下LA) が生じるタイミングについて確認する. その後, *It*-Cleft構文の構造について Mikkelsen (2005) のコピュラ文の構造をもとに提案し, その構造においては焦点要素の移動が可能であることを示す.

3.1 Maximality

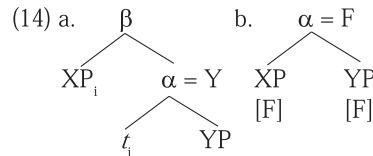
Rizzi (2015) や Shlonsky and Rizzi (2018) では, Chomsky (2013) で論じられたLAの考えを援用し, 基準の凍結をラベルの観点から引き出す提案を行なっている.

Chomsky (2013) では, 併合 (Merge) 操作の結果として生成された統語対象物 (Syntactic Object, 以下SO) が概念・意図 (conceptual-intentional) のインターフェイスで解釈されるためには, 例えば, そのSO全体がどのようなものなのか, といった情報が必要とされ, その情報を提供する役割をラベルが果たすと論じられている. LAはラベルを決定するためのアルゴリズムであり, 最小探査 (Minimal Search) によって最も近い主要部がSOのラベルを決定する. 例えば, ある併合操作の結果生成されたSOが, (13a) のように主要部Hと句XPの集合である場合, LAの適用を受けると, 最小探査によって最も近い主要部がHだと判断され, 主要部HがそのSOのラベルとなる. このように, 最小探査によって最も近い主要部を判断することで, SOのラベルが決定される.

しかしながら, (13b) のように, 併合操作の結果生成されたSOが句XPと句YPの集合となる場合もある. この場合, LAを適用すると, 最小探査によってXPの主要部XとYPの主要部Yの両方が最も近い主要部の候補となる. そのため, (13b) の場合, このままではSOのラベルを1つに決定することができない. (13b) の状況下でラベルを決定する方法として, Chomsky (2013) は2つの方法を提案している. 1つ目が, (14a) のように, XPまたはYPのどちらかが移動する方法, 2つ目が, (14b) のように, XPとYPが共有する最も顕著な素性がラベルになるという方法である.⁹ 例えば (14a) のように, ある集合 α の中からXPが移動した後にLAが適用された場合, XPの移動元 (すなわち, (14a) の t_i) については, LAの適用に対して不可視 (invisible) になる. そのため, 最小探査はYPの内部のみを探索し, 最も近い主要部がYであると判断する. その結果, α のラベルはYとなる. また, (14b) のように, ある集合 α の中で, XPにもYPにも共通する素

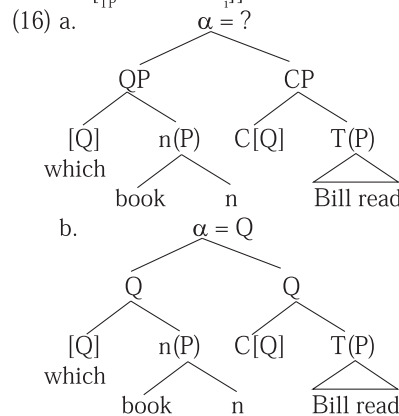
性 [F] が存在していた場合, 最小探査の結果, 共通する素性 [F] をラベルとして利用し, 結果として, α のラベルはFとなる.

- (13) a. $SO = \{_{\alpha} H, XP\} \rightarrow H$ がラベルになる ($\alpha = H$)
 b. $SO = \{_{\alpha} XP, YP\} \rightarrow$ ラベルが決定されない ($\alpha = ?$)



Rizzi (2015) や Shlonsky and Rizzi (2018) では, (14b) の方法とMaximalityを想定し, 基準の凍結をラベルの観点から捉え直している. 例えば, (15a) のような間接疑問文は, (15b) のように埋め込み節のCP指定部位置から主節のCP指定部位置まで移動することはできない. 従来のカートグラフィ分析であれば, 埋め込み節のCP位置で既にwh句移動に関する基準 (WH-Criterion) が満たされているため, (15b) のような移動は (4) の基準の凍結から説明されていた. これをChomsky (2013) のLAの観点から考えてみると, (15a) の埋め込み節CPの派生段階においては, (16a) のように, QPとCPが併合している状態となり, このままでは α のラベルが決定されない. しかし, それぞれの主要部が共通して有している疑問の [Q] 素性が一致をすることで, Qが α のラベルになる.

- (15) a. John wonders [_{CP} which book_i [_{TP} Bill read t_i]]
 b. *Which book_i does John wonder [_{CP} t_i [_{TP} Bill read t_i]]



Rizzi (2015) では, (16b) のように共通の素性が α の

ラベルになることで、(16b)の α の位置が最大投射となり、かつての最大投射であったQPやCPは、中間投射の扱いになると想定している。Rizzi (2015)では更に、句の移動 (phrasal movement) は、最大投射のみが移動できるという一般原理とラベルの関係性から、(17)のMaximalityを提案している。(17)に従えば、(16b)において最大投射となる α は移動可能であるが、素性の共有によって中間投射と同じ扱いとなったかつてのQPは移動ができなくなる。このように、Rizzi (2015)では、(15b)において、埋め込み節CPからのwh句の移動ができないことは、従来の基準の凍結ではなく、LAの結果と(17)のMaximalityの観点から導き出せると論じている。

(17) Maximality

Phrasal movement can only involve maximal objects with a given label. (Rizzi 2015: 22)

3.2 LAのタイミング

Chomsky (2013, 2015)において提案されたLAであるが、LAが適用されるタイミングについて確認したい。Chomsky (2015)では、LA適用のタイミングについて、転送 (Transfer) 操作の一部として、フェイズ (Phase) 単位で適用されると論じている。また、Chomsky (2000, 2001, 2004)以降、フェイズ主要部は一般的にCと v^* と想定されている。従って、LAはCPと v^*P の単位で適用され、それ以外の場合、例えば、非対格動詞 (unaccusative verb) を含む vP の単位では、LAが適用されないということになる。 vP レベルでLAが適用されないのであれば、仮に(18)の図のように、 vP 内部に焦点素性を有する句 $XP_{[Foc]}$ とFoc主要部が生じたとしても、転送操作は生じず、上位のフェイズが生じるまではLAの適用を受けないことになる。つまり、たとえ基準を満たす位置に指定部と主要部が生じたとしても、(18)の段階では、 α のラベルは未決定のままとなる。

(18) $[_{vP} v [_{\alpha} XP_{[Foc]} [Foc [\dots]]]]$

従来のカートグラフィ分析であれば、(18)の段階で $XP_{[Foc]}$ とFocが指定部-主要部の一致関係を満たし、一致関係を満たすとすぐに基準の凍結が生じ、 $XP_{[Foc]}$ はこれ以上移動することはできなくなる。しかし、3.1節で論じたMaximalityと本節の議論を合わせると、

(18)の段階では $XP_{[Foc]}$ の移動が可能となる。3.1節に提示した(17)のMaximalityは、ラベルが決定されている要素の中で最大投射のみが移動できる、という提案であった。Maximalityを考慮に入れて(18)の派生を考えてみると、(18)の段階ではLAが適用されていないため、 α は最大投射として考えることができず、 $XP_{[Foc]}$ がまだ最大投射として機能することとなる。つまり、(18)の段階では、まだ $XP_{[Foc]}$ が移動可能であると言える。

3.3 It-Cleft構文の構造と焦点要素の移動

本節では、It-Cleft構文の具体的な構造を提案し、更に3.1節のMaximalityについての議論、3.2節のLAのタイミングについての議論を踏まえることで、(3)の例が説明できることを示す。

本論では、英語のIt-Cleft構文は、be動詞などの連結詞を用いたコピュラ文 (copular sentence) の構造に分裂節が付加している構造であると想定する。尚、コピュラ文の構造については、Mikkelsen (2005)のコピュラ文の構造を援用する。Mikkelsen (2005)では、be動詞が、叙述関係を示すPredPをその補部を取る(19)の構造を想定している。コピュラ文の主語はPredPの指定部位置にあり、TP指定部へ最終的に移動する。また、Mikkelsen (2005)では、コピュラを非対格動詞の一種であると想定し、 v_b 主要部として表記している。 v_b はTに助動詞などが生起しない限り、Tへ主要部移動を行う。

(19) $[_{TP} Subj_i T [_{v_bP} v_b(\text{be}) [_{PredP} t_i \text{Pred XP}]]]$
(cf. Mikkelsen 2005: 167)

また、Belletti (2015)の想定を一部援用し(2.2節(9)の構造を参照)、コピュラとPredPの間にFocPが生起できると想定する。つまり、It-Cleft構文の焦点要素は、(20)のXPが示すように、コピュラ文構造の中で、分裂節とは独立して焦点要素となると想定する。¹⁰

(20) $[_{TP} it_i T [_{v_bP} v_b(\text{be}) [_{FocP} \text{XP}_j \text{Foc} [_{PredP} t_i \text{Pred } t_j]]]]$

分裂節は、(21)のように、Chomsky (1977)以降、分裂節内に移動が関与しているという事実が観察されている。(21a)は複合名詞句からの移動であり、(21b)はwh島からの移動となっているため、非文法的であると説明できる。そのため、It-Cleft構文の分裂節内では、(22)のようにwh操作子 (wh-operator) や空演

算子 (null operator) などが独自に移動していると想定する。

- (21) a. *It is this book_i that I accept [the argument that John should read t_i].
 b. *It is this book_i that I wonder [who read t_i]
 (Chomsky 1977: 95)
- (22) It was **John** [_{Adjunct} Op_i that [_{TP} Mary saw t_i]]

また, *It*-Cleft構文の分裂節は, 焦点要素に対する前提 (presupposition) の意味合いを持つ。Rizzi (1997) のカートグラフィ分析において, 焦点と前提は, (23) のように, FocPの指定部が焦点となり, FocPの補部を前提とする位置関係にある。

- (23)
- ```

 graph TD
 FocP --- ZP
 FocP --- Foc_prime[Foc']
 Foc_prime --- Foc_degree[Foc°]
 Foc_prime --- WP

```

ZP = Focus      WP = Presupposition
- (Rizzi 1997: 287)

(20) のコピュラ文の構造と, (23) の位置関係を踏まえると, 分裂節は, 少なくともFocPの補部, つまり PredPに生起しなければならない。そのため, 本論では, 分裂節がPredPに付加すると想定する。

これらの想定をもとに, (1) のような通常の *It*-Cleft 構文の派生と, その焦点要素を移動した (3a) の派生を, ラベル付けの観点も踏まえながら考えてみたい。(1) は (24) として, (3a) は (26) として再掲する。まず, 通常の *It*-Cleft 構文である (24) から考えたい。通常の *It*-Cleft 構文の場合, (25a) のように, 仮主語の *it* と焦点要素の *John* がそれぞれ Pred の指定部と補部へ併合される。次に, 空演算子の移動が生じた分裂節が付加し, また, (20) で想定したように, PredP の上位には FocP が投射するため, (25b) のように, Foc の指定部に *John* が焦点化移動する。<sup>11</sup> その後, (25c) のように, v<sub>b</sub> や T が併合され, 仮主語 *it* が T の指定部へ移動する。ここで注目すべきは, (25c) の段階において, 従来であれば基準の凍結が生じることとなる β の位置は, v<sub>b</sub> がフェイズではないため, LA の適用は受けていない, ということである。LA の適用を受けていないということは, (25c) の段階においては, 依然として DP の *John* は最大投射のままになっているというこ

とである。そのため, 3.1 節の Maximality の議論に基づき, これらの派生段階では, *John* の更なる移動が可能となっている。また, Chomsky (2015) に従い, 移動は通常の併合操作と同じく, 自由に適用されると考えると, このまま留まることも移動することも可能となる。従って, (25d) のように, フェイズである C が併合され, *John* が移動せずに LA が適用された際, 結果として *John* と Foc 主要部両方が有する [Foc] 素性が β のラベルとなる。

- (24) It was **John** that Mary saw. (= (1))
- (25) a. [<sub>α</sub> it [<sub>Pred'</sub> Pred **John**<sub>[Foc]]</sub>]  
 b. [<sub>β</sub> **John**<sub>[Foc]</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α</sub> [<sub>α</sub> it [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>John</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that Mary saw t<sub>i</sub>]]]]]  
 c. [<sub>γ</sub> it<sub>j</sub> [<sub>T'</sub> T [<sub>v<sub>b</sub>P</sub> v<sub>b</sub>(be) [<sub>β</sub> **John**<sub>[Foc]</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α</sub> [<sub>α</sub> t<sub>j</sub> [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>John</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that Mary saw t<sub>i</sub>]]]]]]]]]  
 d. [<sub>CP</sub> C [<sub>γ=Phi</sub> it<sub>j</sub> [<sub>T'</sub> T [<sub>v<sub>b</sub>P</sub> v<sub>b</sub>(be) [<sub>β=Foc(P)</sub> **John**<sub>[Foc]</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α=Pred(P)</sub> [<sub>α=Pred(P)</sub> t<sub>j</sub> [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>John</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that Mary saw t<sub>i</sub>]]]]]]]]]

次に, 焦点要素が wh 句移動した (26) のような例を考えてみたい。(27a-c) の基本的な派生は, (25a-c) と同じである。先の議論と同様に, (27c) の段階で, β の位置は LA の適用を受けないため, QP の *what* は最大投射のままとなっており, 留まることも移動することも可能となっている。(27d) で [Foc] 素性 (または [Q] 素性) を有するフェイズ主要部 C が併合され, QP が C の指定部へ移動する。最後に, 転送操作の前に LA が適用され, δ は [Foc] 素性 (または [Q] 素性) がラベルとなる。<sup>12</sup>

- (26) **What** was it that you saw? (= (3a))
- (27) a. [<sub>α</sub> it [<sub>Pred'</sub> Pred **what**<sub>[Foc][Q]]</sub>]  
 b. [<sub>β</sub> **what**<sub>[Foc][Q]</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α</sub> [<sub>α</sub> it [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>what</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that you saw t<sub>i</sub>]]]]]  
 c. [<sub>γ</sub> it<sub>j</sub> [<sub>T'</sub> T [<sub>v<sub>b</sub>P</sub> v<sub>b</sub>(be) [<sub>β</sub> **what**<sub>[Foc][Q]</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α</sub> [<sub>α</sub> t<sub>j</sub> [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>what</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that you saw t<sub>i</sub>]]]]]]]]]  
 d. [<sub>δ=Foc(P)/Q(P)</sub> **what**<sub>[Foc][Q]</sub> C(Foc/Q) [<sub>γ=Phi</sub> it<sub>j</sub> [<sub>T'</sub> T [<sub>v<sub>b</sub>P</sub> v<sub>b</sub>(be) [<sub>β</sub> t<sub>what</sub> [<sub>Foc'</sub> Foc [<sub>α=Pred(P)</sub> [<sub>α=Pred(P)</sub> t<sub>j</sub> [<sub>Pred'</sub> Pred t<sub>what</sub>]] [<sub>Adjunct</sub> Op<sub>i</sub> that you saw t<sub>i</sub>]]]]]]]]]

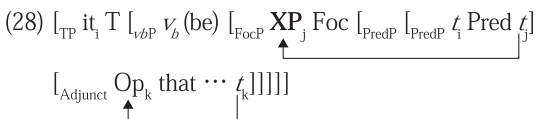
本論の提案では, (27c) の段階で, wh 句が移動しな

い、という選択肢も考えられるかもしれない。しかしながら、もしwh句が移動しなかった場合、wh句を有しながらも、主節ではYes-No疑問文の解釈となってしまう。そのため、wh疑問文としての適切な解釈が得られなくなってしまうことから、この選択肢は排除される。

このように、本論では、(26)のような焦点要素が移動する事例について、基準の凍結をラベルの観点から捉え直したMaximalityと、LAがフェイズ単位で適用される、という想定を援用することで、余分な外置操作を適用することなく、FocP指定部に移動した要素の更なる移動が可能となると説明できる。

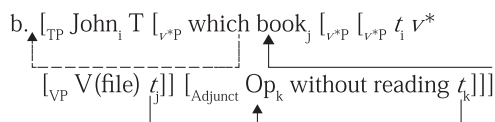
#### 4. 寄生空所構文とIt-Cleft構文

3節では、It-Cleft構文がコピュラ文を基本に作られており、分裂節がPredPに付加する構造を提案した。その提案は、概略(28)のように例示できる。(28)では、主節において焦点要素のXPがPredPの補部からFocPの指定部へ移動し、それに合わせて分裂節内でも空演算子の移動が生じている。焦点位置への移動はA'移動となるため、主節のA'移動に合わせて分裂節内の空演算子移動が生じていると言い換えることもできるだろう。



この構造は、(29a)に例示している寄生空所構文(Parasitic Gap constructions)と類似している。寄生空所構文は、Engdahl(1983)で様々な認可条件が明らかにされ、Nissenbaum(2000)などにおいて、主節のv\*Pレベルでwh句のA'移動が生じると同時に、v\*Pに付加した付加詞節内で空演算子の移動が生じる(29b)の構造が提案されてきた。

(29) a. Which book<sub>i</sub> did John file t<sub>i</sub> without reading pg?



Nissenbaum(2000)では、(29b)の構造において、転

送操作が適用された後、wh句より下のv\*Pである[<sub>v\*P</sub> t<sub>i</sub> v\* [<sub>vP</sub> V(file) t<sub>j</sub>]]の部分と、空演算子を伴った付加詞節である[<sub>Adjunct</sub> Op<sub>k</sub> without reading t<sub>k</sub>]が意味の合成を行い、1つの述部として機能することで、寄生空所が認可されると論じている。Nissenbaum(2000)の分析がIt-Cleft構文にも援用できるかどうかについては、今後の課題とするが、もし仮に、寄生空所構文とIt-Cleft構文が、同じような認可のメカニズムを有しているとするのであれば、寄生空所構文とIt-Cleft構文に対して共通に見られる文法的な特徴も、一元的に説明が可能となる。

その可能性の1つとして、述部名詞句(predicate nominal)を使った事例を考えてみたい。英語のIt-Cleft構文においては一般的に、(30)のように、Tom is a teacherという文の述部名詞句であるa teacherが焦点要素となることはできないと言われている。

(30) \*It's a teacher that Tom is.

興味深いことに、寄生空所構文においても、Postal(1994)で報告されているように、述部名詞句が寄生空所を認可できないという(31a)の事実がある。平叙文では、(31b)のようにturn intoの後ろに述部名詞句としてderelictsを生起させることができ、更に(31c)が示すように、その述部名詞句をwh句移動させることもできる。しかしながら、付加詞節内で述部名詞句の位置を寄生空所にすると、(31a)のように非文法的となる。

- (31) a. \*[What kind of derelicts]<sub>i</sub> did they analyze t<sub>i</sub> after their children turned into pg?  
 b. They turned into derelicts.  
 c. [What kind of derelicts]<sub>i</sub> did they turn into t<sub>i</sub>?

この特徴に対して、Postal(1994)やEngdahl(2001)は、(32)のように、述部名詞句は定代名詞(definite pronoun)に置き換えることができないという特徴から、寄生空所の認可条件として(33)を提案している。

(32) The children turned into \*them.

(Engdahl 2001: 131)

(33) *The Pronominal Condition*

P-gaps cannot occur in positions incompatible with definite pronouns.



(33) は、定代名詞が生じない位置には寄生空所が生じない、という認可条件となっている。本論で想定したように、寄生空所構文と *It*-Cleft 構文の派生や認可のメカニズムが基本的に同じであるとするならば、*It*-Cleft の焦点要素が述部名詞句であることが問題なのではなく、分裂節内の空演算子の元位置（つまり、(28) における、 $t_k$  の位置）が寄生空所と同じく、定代名詞が生起できるような環境でなくてはならないという、(33) の認可条件（もしくは (33) を一般化した認可条件）に違反するため、と説明することが可能となる。<sup>13</sup>

寄生空所構文と *It*-Cleft 構文の認可メカニズムが同一のものであるかどうかについての更なる可能性の探究及び検証は、今後の研究課題としたい。

## 5. おわりに

本論では、新たな *It*-Cleft 構文の構造を提案し、それによって従来のカートグラフィ分析では問題となっていた焦点位置からの要素の移動が可能である点について説明を試みた。

従来のカートグラフィ分析を想定すると、*It*-Cleft 構文の焦点位置は基準の凍結を満たすため、それ以上の移動が生じないと予測されるが、事実として焦点要素の移動は可能となっている。この事実を説明するために、Rizzi (2014) や Belletti (2015) では、義務的な外置を想定しなければならず、また、一般的な外置によって生じる文末焦点の効果についても説明ができない。一方、本論では、*It*-Cleft 構文の焦点要素が移動できるという事実を、インターフェイスの段階で独自に必要とされるラベルと、それに付随する概念を用いて、外置を想定せずに分析を試みた。具体的には、Shlonsky and Rizzi (2018) 等が想定している Maximality の概念、Chomsky (2013, 2015) で想定された LA のタイミング、コピュラ文の構造と、分裂節の付加構造を想定することで、焦点要素が基準の凍結を回避することができることを主張した。

また、本論で想定した *It*-Cleft 構文の構造は、寄生空所構文と類似した構造であり、それぞれの構文は、述部名詞句が認可できないことなどの共通点があることから、共通の認可のメカニズムを有する可能性を示唆した。しかし現時点では、述部名詞句に関する共通点について、原理的な説明がなされていないため、今後の更なる研究が必要となる。

## 謝辞

本論文は、日本学術振興会科学研究費助成金 基盤研究 (C)18K00654 (焦点化現象に基づく談話インターフェイス統語構造の実証的研究、研究代表者：西岡宣明) 及び若手研究 20K13018 (島の効果に対するラベリング分析の可能性についての研究、研究代表者：黒木隆善) の援助を受けている。

また、本論文は、日本英文学会九州支部第73回大会 (ウェブカンファレンス) シンポジウム「焦点化現象に基づく統語構造研究」(2020年10月24日～10月28日開催) における発表内容、及び日本英文学会九州支部第73回大会プロシーディングス (2021年2月9日発行) の内容に加筆、修正を施し、発展させたものである。特に上記学会発表においては、西岡宣明先生 (九州大学)、田中公介先生 (産業医科大学)、前田雅子先生 (西南学院大学)、下仮屋翔先生 (産業医科大学)、大塚知昇先生 (九州大学)、及び九州大学大学院生の方々に、示唆に富むご助言をいただいた。感謝申し上げます。

## 註

- 1 本論文では、議論の簡潔化を目的として、例文の中において、焦点要素（または、焦点位置から移動した焦点要素）を全て太字の表記で統一している。
- 2 vP における左端周辺部の階層構造の分析については、Belletti (2004)、Maeda (2010, 2012, 2014) などを参照のこと。
- 3 (2a) はイタリア語の CP 階層構造を示しているが、遠藤・前田 (2020) によれば、英語では下位の TopP\* については投射しない。また、TopP\* のアスタリスクについては、TopP が多重に投射できることを示している。
- 4 本論では、Chomsky (1993) 以降の、移動のコピー理論に基づき、要素の移動の際にはコピーを移動元に残す立場を取るが、議論の簡素化を目的として、便宜上、痕跡を示す  $t$  や同一指標などを使って表記する。
- 5 *It*-Cleft 構文の構造については、焦点要素が分裂節内部から焦点位置まで直接移動する立場や、空演算子 (Null Operator) が分裂節内で移動し、焦点要素は直接焦点位置に生起する立場などがある。Rizzi (2014) では前者を採用し、*It*-Cleft 構文の焦

点要素は、分裂節内部から分裂節内の左端周辺部である、 $Foc_{Cleft}$ の指定部へ直接移動すると論じている。

- 6 Belletti (2015) では、(9) の構造において、*be* は一般的なcopulaの意味で、*che* はsentential predicateを導く補文標識 (complementizer) の一般例として表示している。本論では、英語のIt-Cleft構文について論じるため、*che* は英語のthatと同等のものとして考える。また、[*ce/it*] は仮主語の一般例として表示している。
- 7 Belletti (2015) は、主語が焦点要素となるIt-Cleft構文と目的語が焦点要素となるIt-Cleft構文では、異なる位置に焦点要素が移動すると論じている。具体的には、主語が焦点要素となる場合にのみ、新情報を担う焦点 (new information focus) の解釈が可能となるため、新情報を担う焦点の場合には、主節のvP指定部の上位にあるFocP指定部へ移動するという提案をしている。その一方で、対比的な焦点 (contrastive focus) の解釈となる場合には、主語であっても目的語であっても(9)におけるFocP指定部へ移動すると論じている。本論では、英語の対比的な焦点を示すIt-Cleft構文のみに議論を絞って分析を行う。
- 8 この問題点について言及いただいた、産業医科大学の田中公介先生に感謝申し上げる。
- 9 Chomsky (2013, 2015) では、「移動」も併合操作の一種であるとし、内的併合 (Internal Merge) として捉え直されている。本論でもChomsky (2013, 2015) の考えに即し、従来の「移動」は内的併合であると想定しているが、議論を簡潔にするために、便宜上、「移動」という表現で統一している。
- 10 Shlonsky and Rizzi (2018) では、倒置コピュラ文 (inverse copular sentence) においてコピュラとPredPの間にFocPを想定している。本論では、倒置を引き起こしていない英語の叙述のコピュラ文 (predicative copular sentence) であっても、(i) のようにコピュラの補部に焦点要素が生じることから、コピュラ文では少なくとも、コピュラとPredPの間にFocPを想定することは妥当な想定であると考えられる。

- (i) A: What was John? (Was John the culprit or the victim?)  
or  
A': Tell me something about my cousin John and his role in the crime.  
B: John/he was the CULPRIT.  
(Heycock 2012: 216)

- 11 付加構造のラベルが具体的にどのような形式となるかについては、対併合 (Pair Merge) やLate Mergeの可能性も検討する必要がある。この点については、付加構造の詳細も含め、今後の課題としたい。本論では、付加構造がsegmentを作る従来からの表記を用いて議論を進める。
- 12 本論の提案では、wh句が移動した場合、 $\beta$  の位置にFoc主要部だけが残ることになる。この場合、Foc主要部がどの要素とも一致していない状態になることが問題となるかもしれない。1つの解決策として、Obata and Epstein (2011) のFeature-Splitting分析を援用する方法が考えられる。(26)における*what*など、argumentのwh句は[Foc]素性と共に、[Q]素性も有していると考えられる。もし仮に、(27c)の段階でwh句とFoc主要部が一致を生じさせた後で、(i)のようにwh句の[Foc]素性を切り離し、更に、「切り離された素性が残っているコピーはLAの際に可視的になる」という追加の想定を立てることができれば、 $\beta$ のラベルも適切に決まる可能性がある。しかし、この想定が正しいとすると、新たな問題として、(3b)のような、焦点要素そのものが焦点化移動できる事例を説明することができない。この問題に関しては、今後の課題としたい。

- (i) [ $_{\delta=Q(P)}$  what[Q] C(Q) [ $_{\gamma=Phi}$  it $_j$  [ $_T$  T [ $_{vbP}$  vb(be) [ $_{\beta=Foc}$  <what>[Foc] [ $_{Foc'}$  Foc [ $_{\alpha=Pred(P)}$  [ $_{\alpha=Pred(P)}$  t $_j$  [ $_{Pred}$  Pred t $_{what}$ ]] [ $_{Adjunct}$  Op $_i$  that you saw t $_i$ ]]]]]]]]]]

- 13 他の説明の可能性として、Poole (2018) が挙げられる。Poole (2018) は再構築と意味タイプの観点から述部名詞句の生起する位置などについて論じている。この可能性については、九州大学の林慎将先生より大変有益なご示唆をいただいた。感謝申し上げます。また、述部名詞句が寄生空所を認可できないことについての他の可能性については、Hayashi (2021) も参照のこと。

## 参考文献

- 1) Belletti, Adriana (2004) Aspects of the Low IP Area. *The Structure of IP and CP: The Cartography of Syntactic Structures 2*, ed. by Luigi Rizzi, Oxford University Press, Oxford/New York: 16-51.
- 2) Belletti, Adriana (2015) The Focus Map of Clefts: Extraposition and Predication. *Beyond Functional Sequence: The Cartography of Syntactic Structures Vol. 10*, ed. by Uri Shlonsky, Oxford University Press, Oxford/New York: 42-59.
- 3) Chomsky, Noam (1977) On Wh-Movement. *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, Academic Press, New York: 71-132.
- 4) Chomsky, Noam (1993) A Minimalist Program for Linguistic Theory. *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, MIT Press, Cambridge, Massachusetts: 1-52.
- 5) Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 6) Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Marin, David Michaels and Juan Uriagereka, Cambridge, Massachusetts: 89-155.
- 7) Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, MIT Press, Cambridge, Massachusetts: 1-52.
- 8) Chomsky, Noam (2004) Beyond Explanatory Adequacy. *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures Vol. 3*, ed. by Adriana Belletti, Oxford University Press, Oxford: 104-131.
- 9) Chomsky, Noam (2013) Problems of Projection. *Lingua* 130: 33-49.
- 10) Chomsky, Noam (2015) Problems of Projections, Extensions. *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, John Benjamins, Amsterdam: 1-16.
- 11) É. Kiss, Katalin (1998) Identificational Focus versus Information Focus. *Language* 74: 245-273.
- 12) 遠藤喜雄・前田雅子 (2020) *カートグラフィー*. 開拓社, 東京.
- 13) Engdahl, Elisabet (1983) Parasitic Gaps. *Linguistics and Philosophy* 6: 5-34.
- 14) Engdahl, Elisabet (2001) Versatile Parasitic Gaps. *Parasitic Gaps*, ed. by Peter W. Culicover and Paul M. Postal, MIT Press, Cambridge, Massachusetts: 128-145.
- 15) Haegeman, Liliane, André Meinunger and Aleksandra Vercauteren (2014) The Architecture of *It*-Clefts. *Journal of Linguistics* 50: 269-296.
- 16) Hayashi, Norimasa (2021) Deducing Parasitic Gaps from Form Copy. manuscript, Kyushu University.
- 17) Heycock, Caroline (2012) Specification, Equation, and Agreement in Copular Sentences. *The Canadian Journal of Linguistics* 57(2): 209-240.
- 18) Maeda, Masako (2010) The Criterial Freezing Effect and Split A'-Movement. *English Linguistics* 27 (2): 270-296.
- 19) Maeda, Masako (2012) The Fine Structure of vP Periphery and Locative Inversion/Heavy NP Shift. *JELS* 28: 267-273.
- 20) Maeda, Masako (2014) *Derivational Feature-based Relativized Minimality*. Kyushu University Press, Fukuoka.
- 21) Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses: Specification, Predication and Equation*. John Benjamins Publishing, Amsterdam.
- 22) Nissenbaum, Jonathan W. (2000) *Investigations of Covert Phrase Movement*. Doctoral dissertation, MIT.
- 23) Obata, Miki and Samuel D. Epstein (2011) Feature-Splitting Internal Merge: Improper Movement, Intervention, and the A/A' Distinction. *Syntax* 14(2): 122-147.
- 24) Poole, Ethan (2018) Constraining (shifting) types at the interface. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 22, Vol. 2, ZASPiL 61, ZAS, Berlin:

- 217-234.
- 25) Postal, Paul M. (1994) Parasitic Gaps and Pseudo-Parasitic Gaps. *Linguistic Inquiry* 25: 63-117.
- 26) Reeve, Matthew (2010) *Clefts*. Doctoral dissertation, University College London.
- 27) Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, Kluwer, Dordrecht: 281-337.
- 28) Rizzi, Luigi (2006) On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects. *Wh-Movement: Moving On*, ed. by Lisa Cheng and Nibert Cover, MIT Press, Cambridge, Massachusetts: 97-133.
- 29) Rizzi, Luigi (2014) Some Consequences of Criterial Freezing. *Functional Structure from Top to Toe: The Cartography of Syntactic Structures* Vol. 9, ed. by Peter Svenonius, Oxford University Press, Oxford/New York: 19-45.
- 30) Rizzi, Luigi (2015) Notes on Labeling and Subject Positions. *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, John Benjamins, Amsterdam: 17-46.
- 31) Ross, John R. (1986) *Infinite Syntax!*. Ablex, Norwood, New Jersey.
- 32) Shlonsky, Ur and Luigi Rizzi (2018) Criterial Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions. *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*, ed. by Jutta Hartmann, Marion Jäger, Andreas Kehl, Andreas Konietzko and Susanne Winkler, Mouton de Gruyter, Berlin/Boston: 29-65.
- 33) Tanaka, Hiroyoshi (2011) On Extraposition from NP Constructions: A Phase-based Account. *English Linguistics* 28 (2): 173-205.

Received date 2021年11月26日

Accepted date 2022年1月14日